



Title	子どもの標準語と関西方言の使用について：大阪府に住むある一家庭のホームビデオを対象に
Author(s)	鳥路, 真友香
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2023, 19, p. 46-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92432
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

子どもの標準語と関西方言の使用について —大阪府に住むある一家庭のホームビデオを対象に—

鳥路 真友香

【要旨】

本稿は、関西方言を話す家族のもとで、大阪府に住む子どもが、成長するにつれてどのように標準語、関西方言を使うようになっていくかを、一家庭のホームビデオを用いて調査し、その結果を、断定辞・確認要求の表現・否定表現・禁止表現・アクセントの点からまとめたものである。対象の子どもへの家族からのインプットは関西方言が多いが、子ども本人はことばを話し始めた時点から標準語の形式の使用量が家族よりも多いという結果が得られた。そして、断定辞では、相手別の使用数を見ると、妹に対して話す時やごっこ遊びをする際には標準語が、父、母、祖母に対して話す時には関西方言が多いというように、相手によってコードを切り替えようとしている傾向があった。アクセントも同様に、相手や場面によって切り替えているように見受けられた。この結果は、インフォーマントが家族以外から耳にする言葉からも強い影響を受けているということを示すものであると言える。

【キーワード】 関西方言、方言習得、断定辞、アクセント、切り替え

1. はじめに

本稿では、関西方言を話す家族のもとで、大阪府に住む子どもが、成長するにつれてどのように標準語、関西方言を使用していくかを、一家庭で収録されたホームビデオを資料として調査し、その結果をまとめる。ここでは、断定辞、確認要求の表現、否定表現、禁止表現の4つの文法項目において、関西方言、標準語の特徴的な形があらわれる回数を、時期別、発話者別に数えた。また、インフォーマントの用いたアクセントについても観察し、インフォーマントがどのくらいの年齢で、誰に対してどのようなコードを用いているのかを記述する。

2. 先行研究と問題のありか

子どもが標準語・方言のどちらを先に学ぶかということについて、柴田（1977）は、方言が生まれて最初に学ぶ、両親の言葉・生まれたところの言葉であるとしている。その後、真田（1996）は、近畿地方で新しいアクセント形式が生まれてきていることから、1960年代以降の「テレビ世代」¹⁾では、まず耳にするのがテレビの標準語であり、育てる親もどちらかといえば標準語で子どもに接しているため、小学校、中学校ではじめて方言を学習

1) 真田（1996）は1960年代以降の生まれであるとし、上村・白石（1996）では、1995年時点での30代（1956年～1965年生まれ）が、就学前にテレビの普及率が半数を超え、テレビとともに育った「テレビ世代」であり、それよりも上の世代と差異を持つとしている。

するとしている。関西地方に住む幼児の方言習得の実態について具体的に述べられている高木（2006b）には、両親ともに関西方言話者ではなく、関西で育った男児の方言習得プロセスがまとめられている。3 歳ごろまでは両親のことばをモデルに、標準語的な音調を持つことばを習得するが、語彙・文法項目には西日本の特徴がいくつか見られ、その後、同年代の友達との交流が増えると関西方言の要素が目立つようになり、成長するにつれ、地域の人々とのネットワークを形成する中で関西方言ネイティブスピーカーになっていくことを述べている。

そこで、今回は、関西方言を話す家族のもとで、大阪で生まれ育った子どもが、親と同じように関西方言を使うようになっていくのかを考える。

3. 調査の概要

分析対象となるインフォーマント A と、ビデオの中で会話に参加している主な家族の情報について、A から見た続柄で以下の表 1 に示す。表のとおり、A の同居家族は全員、言語形成期を関西方言域で過ごしている²⁾。

資料は、A が 0 歳から 10 歳の間に撮影されたホームビデオ約 27 時間である。本稿では 10 年間で以下の表 2 のように 4 段階に区切ってデータを扱う。A のアウトプットが始まる時点で第Ⅰ期と第Ⅱ期を区切り、第Ⅲ期、第Ⅳ期はそれぞれ、幼稚園入園、小学校入学と、A へのインプットが多様になる段階で区分して考えている。

表 1 インフォーマントおよびビデオに登場する主な家族の情報

話者	生年	居住歴
祖母	1942 年	0-3 歳：大分県中津市、3-7 歳：不明、7 歳：兵庫県西宮市、8 歳：大阪市、9-22 歳：兵庫県尼崎市、22 歳：西宮市、22-34 歳：広島市、34 歳-：大阪府豊中市
父	1967 年	0-3 歳：大阪府茨木市、3-24 歳：滋賀県大津市、24 歳-：豊中市
母	1968 年	0-8 歳：広島市、8 歳-：豊中市
A	1995 年	0 歳-：豊中市
妹	2000 年	0 歳-：豊中市

表 2 データの区分

時期区分	A の年齢※	当時の状況など
第Ⅰ期	0:0-1:9	A が話し始めるまで。ほぼ毎日祖母と会う。父との接触は主に土日のみ。
第Ⅱ期	1:11-4:1	A が話し始めてから幼稚園入園まで。教育テレビのビデオをよく見る。
第Ⅲ期	4:11-6:8	幼稚園入園（4:9）から小学校入学まで。5:3 で妹が生まれる。
第Ⅳ期	7:0-10:0	小学校入学（6:9）以降。ほぼ同時期に妹が話し始める。

※収録時の年齢を「年齢:月齢」で示す。たとえば「1:9」は「1 歳 9 ヶ月」のことである。

2) ここでは関西方言について、真田監修（2018）を参考に、京都府（丹後地方を除く）、滋賀県、大阪府、兵庫県（但馬地方を除く）、奈良県、和歌山県、三重県で広く用いられることばとする。

4. 調査結果

ここでは、断定辞、確認要求の表現、否定表現、禁止表現を取り上げ、関西方言に特徴的な形式、およびそれに対応する標準語形式の使用数を時期別、発話者別に数えた結果を示す。また、形式によってどちらか一方に決まらず、どちらの形式も同じ程度使っている場合など、必要に応じて話しかけた相手別の集計も行う。

4.1. 断定辞

ここでは、関西方言に特徴的な断定辞「ヤ」とそれに対応する標準語の形「だ」の使用状況を調べる。それぞれ、主節に使用される場合・従属節に使用される場合に分けて考え、断定辞を含む接続詞についてもこの節で扱う。全体の結果を示した後、A が話しかけた相手別の分析を行う。

4.1.1. 主節に使用される断定辞

断定辞単体の「だ・だった」「ヤ・ヤッタ」と、断定辞に終助詞が接続する形「だわ・だな・だね・だっけ・なの・だもん」「ヤワ・ヤナ・ヤネ・ヤッケ・ヤッタッケ・ヤノ・ヤモン」の使用をまとめたものが以下の表 3 である³⁾。表ではそれぞれ「だ系」「ヤ系」としてまとめている。

表 3 断定辞+終助詞の話者別使用数※

話者	形式	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	計
祖母	だ系	2	5	—	1	8
	ヤ系	17	16	6	11	50
父	だ系	—	—	—	—	—
	ヤ系	3	53	2	3	61
母	だ系	—	—	—	—	—
	ヤ系	4	3	4	1	12
A	だ系		11	13	5	29
	ヤ系		11	12	7	30
妹	だ系				3	3
	ヤ系				3	3

※用例が見られなかったものを「—」で、A・妹については発話自体がない時期を斜線で示す（以下同様）。

家族は A の年齢に関わらず関西方言の断定辞を使用しており、標準語は少ない。しかし、A は話し始めた頃から標準語、関西方言のどちらの断定辞も同じくらい使用している。以下は A が標準語を用いて話している例であり、ここでは父は関西方言のアクセントで話している。なお、文字の上に傍線を引いたところが高く発音されている部分である。

3) 「だもん」「ヤモン」について、「モノ」は終助詞ではないが、終助詞と似た働きをしていると捉えて分析対象に含めた。なお、「だもん」は A が 1 回、「ヤモン」は A が 3 回、父が 2 回使用している。

(1) 【談話例 1】1999 年 3 月頃 (A 3:8 頃)

ひな祭りのケーキを A が父の分まで食べようとしている。

- 1 父 食べちゃうよパパ。
- 2 A いやだ。
- 3 父 だって A、二個もそんなん。
- 4 A はい パパ これ ケーキ。
- 5 父 ちゃんとしたケーキ ちょうだい？
- 6 A いーやだー。

4.1.2. 従属節に使用される断定辞

続いて、断定辞に接続助詞が後続する、従属節に使用される断定辞の形を見る。ここでは、「だけど・だから・なのに」「ヤケド・ヤカラ・ヤノニ」を分析対象としている（表 4）。

表 4 断定辞+接続助詞の話者別使用数

話者	形式	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	計
祖母	だ系	-	-	-	-	-
	ヤ系	1	4	2	2	9
父	だ系	-	-	-	-	-
	ヤ系	-	1	1	-	2
母	だ系	-	-	-	-	-
	ヤ系	1	-	1	3	5
A	だ系	/	-	4	10	14
	ヤ系	/	-	-	1	1
妹	だ系	/	/	/	3	3
	ヤ系	/	/	/	1	1

ここでも、断定辞、断定辞+終助詞と同様に、A 以外の家族は関西方言形を主に使っており、A が標準語形を多く使っている。ただ、ここでは主節に使用される断定辞と比べて、A は関西方言形をほとんど使用せず、標準語形の使用に偏っている。

4.1.3. 断定辞を含む接続詞の使用

資料の中で使用が観察された、断定辞を含む接続詞「だけど・だから・だって」の使用数をまとめたものが以下の表 5 である（妹の用例はなかったため表からは省いてある）。上述の接続詞は、「ヤ系」として「ヤケド・ヤカラ・ヤッテ」も関西方言として使用されることはあるが、接続詞「ヤ系」は誰からも観察されなかった。つまり、父・母・祖母は接続詞としては「だ系」を、断定辞+接続助詞としては「ヤ系」を使用し、役割によって「だ系」を使うのか、「ヤ系」を使うのかの形式が決まっている。しかし、A は「だけど・だから」は接続詞としても、断定辞+接続助詞としても同じ形を用いている。そのため、役割によって形式が決まっているというよりも、A が使用できる形式が 1 種類であること

表5 接続詞の話者別使用数

話者	形式	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	計
祖母	だから	-	-	3	-	3
父	だって	-	2	-	-	2
母	だから	1	-	-	1	2
	だって	-	-	-	1	1
A	だけど		1	-	1	2
	だから		-	2	1	3
	だって		2	-	-	2

が考えられる。以下に「だから」が断定辞＋接続助詞として使われている場合、接続詞として使われている場合のAの発話例を示す。

(2) A もう7歳、10月**だから**。(2002年10月 A 7:3)

(3) 今日お誕生日なの。**だから**パパとママから買ってもらったの。

(2003年7月 A 8:0)

4.1.4. Aが話しかける相手による違い

以上より、主節に使用される断定辞について、Aが標準語の形と関西方言の形を同程度に使用していることがわかったが、データから、相手や場面によって使用しやすいコードがどちらかに決まっている可能性が見て取れた。Aの用例について、話しかける人物や場面ごとに整理したものが表6である。表から、父・母・祖母に向かっては標準語の形よりも関西方言の形を使用し、妹・カメラに向かって話をする時や絵本を読み上げる際には関西方言よりも標準語の形を使いやすいことがわかる。以下の談話例2は、Aと妹が公園で遊んでいる場面である。2行目までは父に向かって話しており、3行目からは姉に続いて段差を上ろうとする妹に向かって注意をしている場面である。

(4) 【談話例2】2002年5月頃 (A 6:10頃)

- 1 A あ、そう。
- 2 A こっから上ればいいんやね。
- 3 A 上れない。
- 4 A 履けないよ。
- 5 A 上れないんだよ。

表6の結果や上の談話例からは、岩根(1998)が指摘するように、妹に対して姉らしく話す時、「ごっこ」の時は標準語コードの範囲であるということが確認できる。また、父・母・祖母に対して関西方言を使用するのは、彼らが使う形にAが使用する形式を合わせているという可能性が考えられる。

表6 断定辞、断定辞+終助詞 相手別使用数

話者	対者・場面	形式	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	計
A	→父	だ系		3	3	-	6
		ヤ系		3	9	2	14
	→母	だ系		1	-	-	1
		ヤ系		4	-	-	4
	→祖母	だ系		-	-	-	-
		ヤ系		3	1	-	4
	→妹※	だ系			7	-	7
		ヤ系			-	-	-
	→カメラ	だ系		1	2	3	6
		ヤ系		-	-	1	1
	絵本読み上げ ⁴⁾	だ系		5	-	-	5
		ヤ系		-	-	-	-
	独り言	だ系		-	1	1	2
		ヤ系		-	-	-	-
	なりきり	だ系		1	-	-	1
		ヤ系		-	-	-	-

※「→妹」欄の第Ⅱ期は、A が発話できる時期ではあるが、妹がまだ生まれておらず該当の発話はないため斜線を引いている。

4.2. 推量・確認要求

4.1 で見た断定辞「だ」や「ヤ」に関連するものとして、確認要求・推量を表す「だろ」「ヤロ」が挙げられる。しかし、データ中には推量の意味で「だろ」が一度A(3:5頃)から出されたのみ(絵本読み上げ時の「どこだろね」)で、他は「ヤロ」もしくは同じ意味を表わすものとして「でしょ」が使われていた。また、どちらも推量の用法で用いられることは少なく、すべて合わせて表7の6回のみであった。

一方、確認要求で使用された例は表8の通りである。父親は「でしょ」「ヤロ」を同じくらいの頻度で使用しているが、Aの家族は父親を除いて「でしょ」を多く使い、「ヤロ」は

表7 推量「だろ」「ヤロ」「でしょ」の話者別使用数

話者	形式	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	計
祖母	でしょ	1	-	1	-	1
父	でしょ	-	1	-	-	1
母	ヤロ	1	-	-	-	1
A	だろ		1	-	-	1
	ヤロ		-	-	1	1

- 4) 「絵本読み上げ」がカウントされている第Ⅱ期には書かれている文字はまだ読めないため、絵本の文章をそのまま読み上げるという意味ではなく、自分で物語を作って絵本を見ながら話している場面のことである。

子どもの標準語と関西方言の使用について

表 8 確認要求「でしょ」「ヤロ」の話者別使用数

話者	形式	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	計
祖母	でしょ	3	7	9	6	25
	ヤロ	1	1	3	-	5
父	でしょ	-	4	-	-	4
	ヤロ	-	3	2	1	6
母	でしょ	2	3	2	3	10
	ヤロ	-	-	-	1	1
A	でしょ		8	8	3	19
	ヤロ		-	1	1	2
妹	でしょ				2	2
	ヤロ				-	-

表 9 「でしょ」「ヤロ」の相手別使用数

話者	対者	形式	確認要求	推量
祖母	→A	でしょ	12	1
		ヤロ	3	-
	→母	でしょ	9	-
	→妹	でしょ	4	1
	→従姉	ヤロ	1	-
	→伯母	ヤロ	1	-
父	→A	でしょ	4	1
		ヤロ	5	-
	→母	ヤロ	1	-
母	→A	でしょ	6	-
	→父	でしょ	2	-
		ヤロ	1	-
	→祖母	でしょ	2	-
		ヤロ	-	1

少ない。相手によって使用する形式を変えていないかを明らかにするため、表 9 に父・母・祖母の使う「でしょ」「ヤロ」の相手別使用数をまとめた。表 9 からは、相手によってどちらかの形を選んで使っているというよりは、基本的には母と祖母は誰に対しても「でしょ」を使うこと、父は A に対してどちらの形も同じくらいだけ使っていることがわかる。A が「でしょ」を多く使っているという結果（表 8）は母や祖母と同じ傾向である。

確認要求は、聞き手に対する発話態度を示すモダリティ（井上 2002）に関わる表現であり、聞き手が必要となる表現である。そのため、普通体と考える「だろ」や「ヤロ」ではなく、丁寧体の「です」の活用である「でしょ」を使うことで丁寧さを示そうとしているのではないかと考えられる。尾崎（2003）が東京圏と阪神圏の大学生に行った調査によると、「だろ」は関東の男性の 5 割程度が使う表現であるが、それに対応する関西方言の「やろ」は男女差なく 9 割ほどの学生が使い、「でしょ」は関東で男女ともに「だろ」よりも使

われる形（男性 6 割ほど、女性 9 割ほど）である。さらに、関西の女性が使う「やろ」は東京の人が否定的に受け止めているだろうと関西地方の学生がイメージしている傾向があったという結果も踏まえると、ここで祖母や母、それにならって A は、「やろ」を避けて、「でしょ」を丁寧な形として用いているように見られる。

4.3. 否定表現

高木（2006a）によると、関西方言の否定辞と語彙的否定形式には、名詞述語・ナ形容詞を否定する際の「ヤナイ」「チャウ」、イ形容詞を否定する時の「ナイ」、動詞を否定す

表 10 名詞述語・ナ形容詞否定の話者別使用数

話者	形式	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	計
祖母	じゃない	－	1	1	－	2
	ヤナイ	3	－	1	－	4
	チャウ	3	3	－	1	7
父	じゃない	－	－	－	－	－
	ヤナイ	1	－	－	－	1
	チャウ	－	4	－	－	4
母	じゃない	－	－	－	1	1
	ヤナイ	－	－	－	－	－
	チャウ	1	－	1	－	2
A	じゃない		1	10	5	16
	ヤナイ		－	－	－	－
	チャウ		－	－	2	2

表 11 動詞否定の話者別使用数

話者	形式	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	計
祖母	ない	4	7	7	3	21
	ン	－	1	1	2	4
	ヘン	2	5	2	1	10
父	ない	－	19	2	4	25
	ン	2	4	－	－	6
	ヘン	3	5	－	5	13
母	ない	4	5	5	3	17
	ン	1	－	1	2	4
	ヘン	－	－	－	－	－
A	ない		41	28	19	88
	ン		4	2	1	7
	ヘン		－	－	4	4
妹	ない				8	8
	ン				1	1
	ヘン				－	－

る時の「ン」「ヘン」がある。ここでは、標準語で名詞述語・ナ形容詞を否定する「じゃない」、動詞を否定する「ナイ」と関西方言の形式を比較する（表 10、表 11）。なお、妹の発話に名詞述語・ナ形容詞の否定表現は現れなかった。

名詞述語・ナ形容詞の否定で関西方言を使用する傾向にあるのは A 以外の家族であり、A は標準語「じゃない」を使用する傾向にある。また、動詞の否定では、家族の全員が標準語の「ない」を多く使う傾向にある。ただし、A と妹は「ない」を「ン・ヘン」よりもかなり多く（8 倍程度）使用しているが、他の家族には子どもたちほど大きな偏りは見られない。主節に使用される断定辞と同じように、A は家族よりも標準語を使うという傾向が見られた。

ちなみに、「じゃないか」に由来する「じゃん」、「ヤナイカ」から由来する「ヤン」については、東京方言と関西方言で特徴的な対立する形式であるため使用数を数えたが、A が一度「じゃん」を使用したのみで、全員「ヤン」のみを使用していた（表 12）。なお妹の発話に当該形式は現れなかった。

表 12 「じゃん」「ヤン」の話者別使用数

話者	形式	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	計
A	じゃん		－	1	－	1
	ヤン		－	5	4	9
父	ヤン	－	8	－	2	10
母	ヤン	－	3	－	－	3
祖母	ヤン	5	9	8	2	24

4.4. 禁止表現

禁止を表す関西方言に「アカン」がある。ここでは、「アカン」とこれに対する標準語の表現として「だめ」をそれぞれ数えたものが表 13 である。また、「アカン」の使用が多かった祖母の談話例、「だめ」の使用が多かった A の談話例を示す。

表 13 禁止表現の話者別使用数

話者	形式	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	計
祖母	だめ	6	2	3	3	14
	アカン	3	4	1	2	10
父	だめ	1	2	－	－	3
	アカン	－	2	－	－	2
母	だめ	3	－	2	2	7
	アカン	－	－	－	－	－
A	だめ		2	15	1	18
	アカン		－	1	－	1
妹	だめ				1	1
	アカン				－	－

(5) 【談話例 3】1995 年 8 月 (A 0:1)

- 1 祖母 寄り目なるやん。
- 2 祖母 そのお目目したらあかんわ、やめとき。

(6) 【談話例 4】2005 年 7 月 (A 9:0)

- 1 妹 ちょっここちに見せてくれる？
- 2 A だめ、お姉ちゃんが撮ってるのー。

A は「だめ」を使用することが多く、「アカン」はほとんど使わず、母と同じ傾向を示している。父の 5 例はすべて A に向けたものであり、「だめ」「アカン」の使用に対者による偏りはない。祖母も「だめ」と「アカン」をほとんど同じだけ使用しているが、「アカン」の 10 例中 7 例は母（祖母にとっての娘）に向けて発したものであり、3 例のみが A に向けられたものである。また「だめ」は 14 例中 11 例が A へ、残りの 3 例が妹へ向けて発されたものである。ここから、A が自分に向けられたものとして耳にする表現には「だめ」が多いことが推測される。A が「だめ」を多く使うのには、家族からのインプットの影響も大きいと考えられる。

4.5. アクセント

ここでは、A のアクセントがどのような形式をとっていたかを 4 例挙げて紹介する。以下では談話例 1 と同様に、上に傍線を引いた箇所を高く発音している部分として示す。

(7) 【談話例 5】1998 年 1 月頃 (A 2:6 頃)

- 1 父 これも歌うの？
- 2 A 歌うの。
- 3 父 歌ってごらん？
- 4 A や、パパ歌ってみ。
- 5 父 パパ知らんよ。
- 6 A 歌って、パパよー。
- 7 父 パパ知らんからなあ。

この時期、父と話す際は関西方言のアクセントを使用することが多い。そして談話例 6 のように、絵本を読んでいる際は標準語のアクセントや関西方言として不自然なアクセントを使用し⁵⁾、父に答える 3 行目では関西方言のアクセントを使用するという例も見られる。

(8) 【談話例 6】1998 年 10 月 (A 3:3)

- 1 A そのまえて、ママに言いました。いかさんがあるけどー、
- 2 父 A ちゃんと読んで。
- 3 A 読んでるよー？
- 4 A カメラに向かってねんねしました。

5) 例えば、4 行目は、標準語のアクセントであれば「カメラに向かってねんねしました」に、関西方言のアクセントであれば「カメラに向かってねんねしました」になることが期待されるが、A のアクセントはどちらとも違っている。

このように、3 歳頃にはアクセントを切り替えている様子が見られるが、妹が生まれた直後には、標準語と関西方言が混ざる時期があった。

(9) 【談話例 7】2000 年 11 月 (A 5:4)

- 1 A そっち向いてもひといてるけど、
- 2 A 見てるやんビデオ、あれビデオやろ？
- 3 A ビデオ見てるからだめだって。向きたいんだったらあっち向いて。
- 4 A ねえ、こやったらいいんだよ、パパのかっこうだよ。

談話例 7 では、全て妹に向かって話しているが、「ビデオ」のアクセントが変わり、1 行目では、「そっち向いても人」までは関西アクセント、「いてるけど」は、形自体は関西方言だが関西方言として不適切なアクセントを用いるなど、それまでには見られなかった話し方になっている。しかし、このような話し方はすぐに見られなくなり、その 2 年後には談話例 8、9 のようにアクセントを切り替えて話している。

(10) 【談話例 8】2002 年 7 月 (A 7:0)

- 1 A も嫌や順番。
- 2 A つぎかわるよ。
- 3 A ばちばちせな、もないんちゃう。

(11) 【談話例 9】2002 年 7 月 (A 7:0、談話例 7 と同じ日)

- 1 A でも本当は、A だけだよ、ということはちゃんと言うておく。
- 2 A おねえちゃん、だけ、のたんじょうびなんだけどね。

談話例 8 は妹と遊んでいる時に順番を待たなければならないことに対して怒っている場面であり、関西方言のアクセントで、関西方言の形式（や、せな、ちゃう）を用いている。談話例 9 はカメラに向かって説明している場面で、標準語のアクセントを用いている。

以上のように、A は話し始めた頃から関西方言のアクセントを使用しており、3 歳の時点では相手によってアクセントを切り替えて話していた。その後、一度標準語アクセントと関西方言のアクセントを混ぜて使う時期を経て、再び相手や場面によってアクセントを切り替えるようになることが観察できる。

5. 考察

ここまで、A の言語使用について時系列に整理した。明らかになったことをまとめると、まず文法項目について、A への家族からのインプットは、断定辞や否定表現では関西方言が多いが、A は比較的に標準語を使う量が多かった。そして、断定辞のように、標準語と関西方言を同じくらいの量使用しているものについて話し相手や場面別に使用数を見ると、妹に対してやごっこ遊びの時には標準語を使用し、父、母、祖母に対しては関西方言を使用するというように、相手や場面によって使用傾向が異なっていた。また、家族が標準語形を使っていた確認要求や禁止表現では A も家族と同様に標準語形を用いていた。

アクセントの面からは、妹が生まれてから 2、3 月の間（5:6 頃まで）は同じ相手に対して標準語と関西方言が入り混じった話し方をすることがあったが、妹が生まれる前、および生まれてから数か月経ってからは相手や場面によってアクセントを切り替えていた。

このような結果は、A が家族からだけではなく、テレビや幼稚園、小学校など、家族以外の話者から耳にする言葉からも強い影響を受け、家族とは違った話しかたを身につけていることを示唆するものである。テレビについては、2 歳頃から、標準語が使われている教育テレビの DVD を繰り返し見ていたといい、このことが、A が標準語の形を多く使っていたことの一つの要因と考えられる。

6. まとめと今後の課題

A は、主節に断定辞を使う際、妹に対する時やごっこ遊びでは標準語、他の家族に対しては関西方言を使うというように対者や場面によってコードを切り替える傾向が見られた。この切り替えはアクセントについても同様であった。接続助詞に繋がる断定辞や否定表現では、他の家族とは異なり、A は標準語の形に偏りがあった。確認要求の表現では母と祖母（「でしょ」が多い）、禁止表現では母と同じ傾向（「だめ」が多い）を見せていた。

今後は文法的な側面から細かく記述する必要があると考えている。特に、否定表現については、用法によって使いやすい形式が違うという可能性もあり、新たに分類しなおす必要があるかもしれない。今後の課題としたい。

【参考文献】

- 井上優（2002）「モダリティ」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック 1』pp.133-150, 科研費報告書.
- 岩根裕子（1998）『児童の方言習得とその運用』平成 9 年度大阪大学文学部卒業論文（未公刊）.
- 尾崎喜光（2003）「用法に地域差が伴う言語表現に対する相互評価—関東と関西の比較—」『社会言語科学』5(2), pp.58-73, 社会言語科学会.
- 上村修一・白石信子（1996）「テレビ世代の視聴特性」『NHK 放送文化研究所年報 1996 第 41 集』pp.179-198.
- 真田信治（1996）「近畿方言の現在」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』pp.76-86, 明治書院.
- 真田信治監修（2018）『関西弁事典』ひつじ書房.
- 柴田武（1977）「標準語、共通語、方言」文化庁文化庁国語課編『ことばシリーズ 6 標準語と方言』pp.22-32, 文化庁文化庁国語課.
- 高木千恵（2006a）『関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相』（『阪大日本語研究』別冊 2）大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- 高木千恵（2006b）「関西における幼児期・児童期の方言習得」真田信治監修『日本のフィールド言語学』pp.300-314, 桂書房.